

## 天馬、空を翔る！

ベートーヴェンの5番は作品10の1、ブラームスのバラードは作品10、そしてショパンの練習曲集も作品10番。「作品10で揃えたのは、意図したプログラムなのですか？」と終演後にご本人にお尋ねしたところ、「そうです」と答えられました。

面白いなあと思いました。近年、演奏会はもとより、CDのカップリングされる曲目にしても、演奏者のアイデアが富みに感じられるようになりました。そして、そのアイデンティティーに演奏者の個性を感じます。作品10番。番号は同じでも、作曲家3者3様で、それぞれの強い個性を感じました。

コンサートで特に印象に残ったのは、ショパンの練習曲集。私は正直、ショパンはあまり好きではないのですが（ロマンティックすぎて・・・？）、ただ例外もあり、彼の「24の前奏曲集」と、この度の「12の練習曲集（作品10）」と同じく「12の練習曲集（作品25）」は、好きなのです（ああ、それから「夜想曲集」も・・・）。ですので、前半の渋い（？）プログラムが終了した後、楽しみにして演奏を聴きました。

小菅さんは、今や中堅ピアニストの中では、一頭地を抜く存在です。ドイツものに強い（得意としておられる）というのは、大巨匠へとつながる階段を上りつつあるということを示しています。その、小菅さんのショパン。同じ曲を彼女は、若かりし頃ソニーに録音していました。さあ、あれからどうなったでしょう。そんな、楽しみもありました。

演奏は堂に入ったもので、鮮やかな技法と、それでいてドイツものに強い彼女のピアニズムを感じさせるように構成のしっかりとした演奏だったと思います。私は、特に弱音の美しさが印象に残りました。成長した、大人のショパンでした。

アンコールで弾かれた作品25の練習曲集からの1曲も、メイン・プログラムが終わりほっとして力がうまく抜けた演奏に感じられ、「ああ、素晴らしいな」と思いました。素敵な、コンサートでした。

パパゲーナc

ほとんどの方は気づかれていたと思いますが、私は最後の頃になって気づきました。今日のプログラムは、みんな「作品10」だったのですね。どれも作曲家が若い時に書かれたものなのに、それぞれ素晴らしい作品でした。特にベートーヴェンの5番ソナタは気に入りました。ベートーヴェンらしい仕掛けで、「ほら、終わるぞ」「まだ次があるぞ」と私たちをコントロールしてきます。“ベートーヴェンにはかなわないな”という作品でした。

小菅さんの演奏は、“早口のアナウンサーが早口になりすぎて、母音を端々で省略してしまって聞きづらい”といった印象があり、もう少しフレーズの最後まで大事に扱ってほしいといつも思っていました。しかし、今日はブラームスの曲などには、しっとりとした響きを持たせ、なかなか良かったと思いました。

クラシックサロンc



<サイン会にて>



<交流会にて>

### 例会評価

○ 会員数	436名
○ サークル数	51c
○ 参加者数	316名
(参加率)	82.8%
○ 例会評価投票数	164
(投票率)	45.4%
○ 評価点	98.8point
○ 新入会	55名

今回の例会は  
私たちが運営を  
担当しました

- ・相見
- ・足立
- ・アラネア
- ・小犬
- ・アンサンブル
- ・カスカーダ
- ・こっとんくらぶ
- ・田部
- ・パパゲーナ
- ・マズルカ
- ・星野
- ・山崎
- ・ゆきんこ

## 「高橋竹童」胡弓演奏に寄せて

### 【特別寄稿】「風の盆」への憧憬

私は山歩きが好きで、富山方面にはよく出かける。今から30年は前のこと、北アルプス登山の帰りに、どこであったか「おわら風の盆」のポスターを見た。男女の青年がすげ傘を目深にかぶり、踊っている場面が描かれていた。その姿に妙に惹かれ、しばらく見とれていたことを思い出す。連れの相棒も、「一度見てみたいものだ」と言う。帰りの車の中から、「(富山県の)八尾とはあの辺りかな」と話しながら帰路についた。

その後しばらくは、実際にその踊りを見に行くことはできなかった。遠方であることと同時に、その行事は9月1日から3日までの3日間しかないと聞いたからだ。しかもその3日が休日にあたることはめったにない。記憶から遠ざかろうとしていく中で、テレビに一瞬取り上げられたり、小説に「風の盆恋歌」の文字を見たりして、その内には一度行ってみようと再度熱が高まってくる。最初のポスターから7、8年は経っていたであろうか、思い切っ行って見た。

すると、富山県八尾町はこのあたりで言うと、日野郡の溝口、江尾、根雨といった山間の小さな町であるが、その日は人であふれかえっていた。何でも、その頃NHKの番組に取り上げられ、急に人気を増し見物が増えたらしい。石川さゆりも歌っていたらしいが、印象には残っていない。とにかく町内の狭い道が人で埋まっている。それでも踊りがやって来ると辺りは静まり、風情が高まってくる。「カメラのストロボを使わないように」と誘導する係りが言っている。薄明かりの中で踊られる姿は幻想的だ。男踊りにしても、女踊りにしても、その所作が洗練されていて、同じ繰り返しであっても引き込まれる。それに胡弓の調べが加わり、謡の朗々とした響きとが溶け合っ、この世のものとは思えない。そのころから廃れつつある日本の風情がそこには残っていた。

しかし何年かおいて、2度目に訪れたときはその様子は大きく変わっていた。見物客が一層増して、その時の風情は大きく失われていた。カメラのストロボどころではなく、喧騒のなかでの一夜となっていた。「阿波踊り」のように見物席こそないが、その質は接近している。それでも“踊り”には魅せられる。その後も何度か出かけたが、ある時の会話には閉口した。雨が降ると「おわら」はやらない。その時は小雨であった。隣の観光客であろう女性が一言。「早くやってよね。こちらは高い金払って来てるんだから・・・」私は、もう少しで声になりそうだった。「あなた方が他人の家に勝手に乗り込んできて、その雰囲気壊してるんですよ・・・」しかしながら、私自身もその一員かと思うと大きなことは言えない。

実は、昨年何回目かの「おわら」に出かけた。おおよその想像はあったが、それを上回る状況だ。マイカーは遠くに足止めされるが、観光バスは近くまでやって来る。その数や10台は下らない。最終時間ともなると、大量の人々が帰りの方向に動いている。私はというと、深夜12時は回った頃に、人の数はまばらになったものの小雨とともに帰路についた。

ここまで読まれた方には申し訳ないと思っている。「小菅優」の感想ではなく、今現在、私の心をとらえているものをここに吐き出す形となってしまった。11月の例会については、担当として書いたものが全てである。当日舞台袖に居たものには、残念ながら演奏については書けない。やはり客席で聴きたいものだ。1月例会はゆっくりと客席で、津軽の風と胡弓による「おわら」を楽しみたい。